

映あり村民之小これ其野原義仲に將軍源義仲に潜居しや
 水精山 あり今に金礦なり其地むくく水精山又令齋を延元
 烽火嶺 本有川の西岸上あり福島の城山と相対を傳云本有殿
 野婦池 越前守の西の麓にあり池三町許其地小女あり系を
 百姓小娘に教つて観ひえまは髪遣ふ立く額小肉角を
 生れ其夫又又娶てて種をまを親家は居る父母も怖て
 逐出を竟小平京に寄つて侍の柳と截る種を其霊鬼より里人
 時水田小機と織車と見る其柳枝系を折ふ小娘今小玉川に
 研犬谷 麻犬年少く成る石壁の下に墜ち大慈悲を案て麻と進ふあると
 斬蛇潭 本有川西岸あり相傳ふり一農夫ありは瀬小舟と節く
 明星巖 本有川の西岸上あり山頭注立
 其地を斬蛇の洞といひ其農夫とて居りて果月死をうけふつ子
 其地を斬蛇の洞といひ其農夫とて居りて果月死をうけふつ子

本有二九七

信
宮腰

救原中二里又宮越くも書に歌中東西に町半相対

正八幡宮

里人云本有義仲は神前にて元服をとり

南宮祠

一村生女神

德音寺

本有義仲の牌を蔵む同基朝日將軍本有義仲宣

公大居士と書に

本有義仲城

本有義仲及び樋口兼光今井兼平画像三幅あり

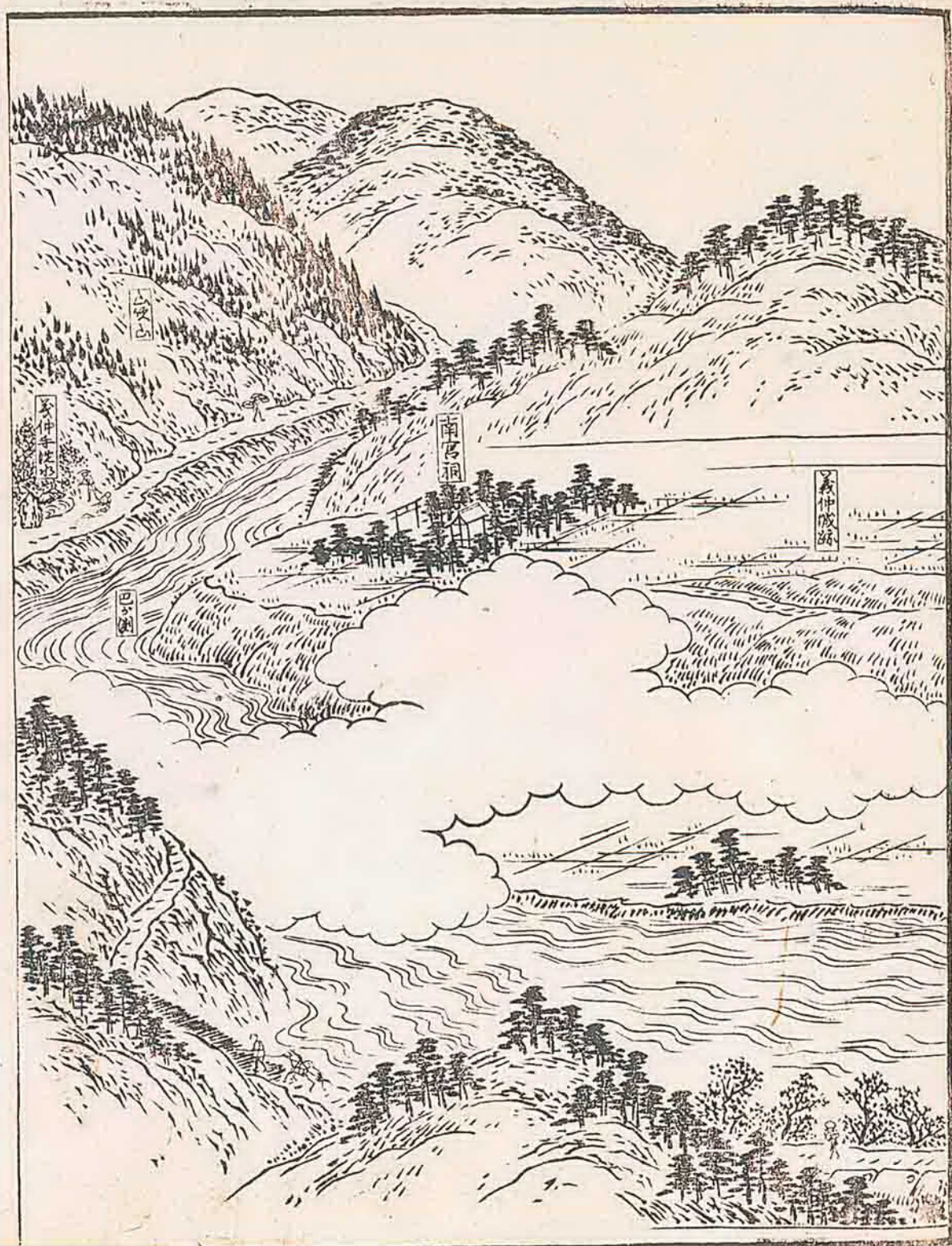
家系と清和天皇七代の孫六條判官為義二男常刀先生義賢義
 義國之義信の館ふあり久壽二年八月其兄義朝と不和なり其子
 惡源左義平死して討平ぐむ義賢小二子あり其妹は義仲家と
 以源三位頼政事するも其次に義仲とて推名を駒王と名
 け父義賢害せし時二衆齊藤別當重盛と共謀して佐列

に來り中二兼遠を托し兼遠を養育し彼を柏原村に養
てこれ小居しむ仁安元年柏原八幡宮に於て元服し今の名の
八幡宮是より名取本名二郎義仲と云ふ治承四年平家上皇と
鳥羽の難宮に蟄居さる時小源三位頼政が勸ふより高倉
宮義兵を起し今旨を諸國の源氏に賜ふ義仲令を蒙り兵を
率ゝ永承元年九月九日越後守長茂を横田川原に合戦し
大いに敗る長茂逃走す武威益著る今井兼平樋口兼光親
忠根歩の親耳目股肱の臣として後醍醐天皇と稱し同二年五月平
軍十萬越中破浪山より義仲進み敗れて大に是城敗る平軍死
その七万人残兵系降に逃降る義仲北に退き越中殿岳に登り七月
廿四日上皇殿より潛幸し義仲供奉し洛に入ると其軍兵凡五萬
平賊帝と奉りて西海に出る義仲父祖の恥を雪む事ふ不世の
功あり八月十六日保祿國武陽より馬頭征夷大將軍に任じ上皇又令て

朝日將軍と云ふ頗朝憲より下りけれなり先高倉宮害小遭ふ其
王子偕と云ふ小園に流落す義仲これを奉りて洛に入即位ありん
更をより上皇聽容あり安徳帝の弟君と云ふ天子にまんと是と
事と聽び大に憤怒を令む人ありと義仲小潜りより上皇兵を起
義仲と討んと欲し義仲大に怒り十一月十九日軍以發し法住寺殿
と攻る官軍大に敗られ公卿令以預り暴虐討ふ甚し源頼朝大に小
驚れ範頼義經の二將と使して義仲と征伐を乞ふ曆元年正月廿二日東
軍洛に入る義仲栗津原に敗走し流落る中て首級被く義仲の人
となり勇猛なりて兵を用ふ事寡と云ふ衆に勝る所必勝被
率ありて大功を立一世の雄なりと云ふ物事ども不業にて術
かゝ誤る大運も隔ぬひつる事悟む處なり

樋口次郎兼光館大樹あり其地

中三権守兼遠の長子なり本名殿小源より居戦功あり所傳に



天王の其一かり元暦元年の春義仲の令次承く兵を率ひ河内小
越と十郎藏人を撃つ正月廿二日東軍洛小入る義仲戦ふる兼光歸る
洛小入る一と一と戦城圍る大小悲しと還小東軍に降か向ふ法住
寺殿攻くる多く官人を殺し其罪赦さるるべくとて六条河原
にわたり斬罪せしむ

今井兼平 駿の東にあり

兼遠の次男なり兄兼光と曰く義仲小仕る属我功あり四天
王の一人なり元暦の春正月廿二日東軍洛小入る附兼平兵を率て
勢を拒る軍攻級ふ率救箇度義仲を東に赴き粟津原まで奮
戦し主君の戦死を聞くと忽ち敵軍攻多く敗る馬上りて自害し
後世其忠を賞に

巴御前 駿の北にあり巴女居る所の御所深なる味む

中三兼遠が女なり義仲妻とて其勢力あり善戦ふ事永中

小陸の戦ふ兵を率く將とつる元暦元年正月廿二日東軍洛小入
義仲の軍敗る勢固ふ勢た士率救るやとて兵終七騎巴女
其中にあり義仲巴女向く日我運令今日小入る死ふ多しと女子
試誘する幸思くく後誘りて速ふと去るへ巴女止む率以
得る別か又敵の中へ入る小内田三郎家吉とて者之力のすなり
巴女と捕んとて馬と並べ巴女髪を持佩刀と抜肩攻めんとて巴女
拳蹴率て其肘と打首級馬を馳る山路を經本着るゆゑ其後
右大將頼朝巴女と居て和國義盛も取勢と先多力の男子と生れ
居しや令に義盛と終に納る後朝比奈三郎泰秀と産み頗る
勢力とありて世に聞ゆ

山吹 駿の北にあり土人云け所

平家物語云義仲小二妻あり一巴一山吹元暦の合戦ふ山吹疾
あつ系降に止る又源平盛衰記云義仲小二妻あり一山葵一山巴何

又善觀之葵破浪山其狀死二龍何より威云山吹之海濱別當
盛が女より其是の姿をあらは

萩曾川 萩の山中より出る

佐還橋 本を架してあり長サ十二間

德音寺橋 長サ十八間

義仲手洗水 湯腰の東道の傍より

石碑云 往古木曾義仲公鎮守南宮神社水

御手洗也唱來廢年歷久矣歎之今

新造立石船者也

奈良井まで一里半駅中南小五町許相對し

信濃 藪原

荅以ふ其峰山同小散在

熊野権現祠 別當六月十五日

極樂寺 周山茂林和尚 古畠十太衛門のこまに建る

本居三才

藪原宅 古畠十太衛門の邸中邸下邸等の址今みか田園といふ

五反田橋 長サ十一間本を架して梁といふ

巢鷹官舎 府下の鷹匠本主の邸小鷹の雛を生むといふ

土産 葡萄 本所の諸村みかを種るは邑特小

名造お六掃 は店多し

折はお六掃を本居れ山中の名造りて山同小田園といふ

多く諸品を製造これを出る業といふ特近近年お六掃を

名して諸州小高小本を棟梁といふを製は掃のより掃り

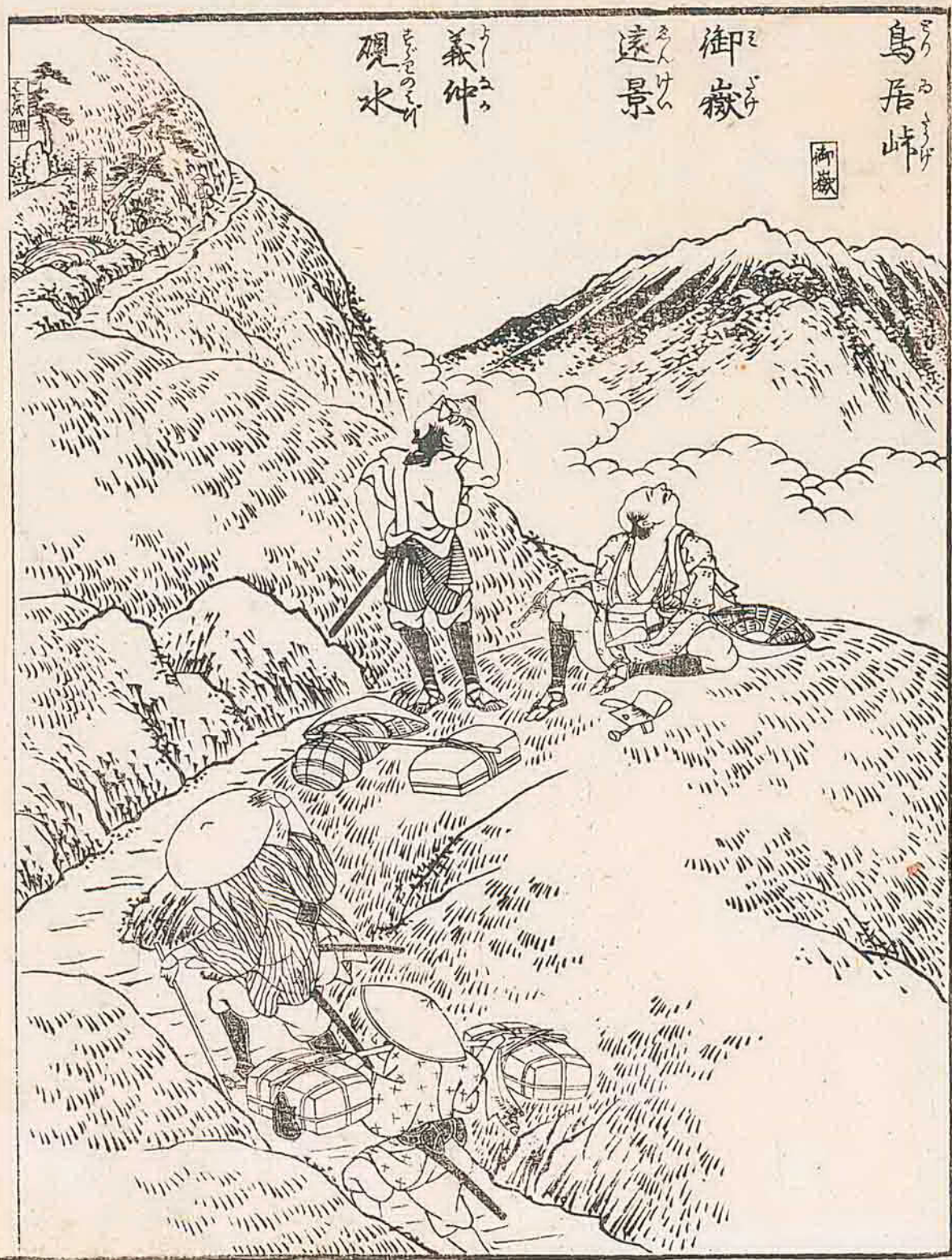
伊焚諾尊にいて清子素盞烏尊熊の川上より奇稲田姫を湯

津の爪掃を清誓小掃のより起まり其後欽明天皇詔ありて

八品大明神と崇光根因の家々を掃とありて

爪掃排掃磨掃 系降後小路大原祠と係特諾尊氏系て八品

昭神とて格匠とて神と系く其恩惠誠報をいしと
 鳥居嶺 峠 坂 嶺 馬 本 系 ぐ した 危 け け あり け け け 本 系 ぐ
 信玄 本 系 義 康 と ころ 合 戦 あり 其 後 天 正 十 年 武 田 勝 頼
 り 今 福 筑 前 守 城 大 將 と して 人 殺 八 千 餘 け け け け 本 系 ぐ
 馬 頭 義 昌 信 長 公 の 弟 方 と して 七 子 孫 人 多 け け 鳥 居 嶺 へ 馳 向 け
 幾 け け け 本 系 勝 利 を 得 け け 甲 州 勢 と 多 け 討 け け け け 武 田 勝 頼
 武 田 氏 弟 松 久 月 け け 年 け 小 積 け け 本 系 義 昌 其 外 叔 家
 謀 及 け 企 け 中 畧 月 十 二 日 信 忠 卿 被 害 け け 弟 出 陣 あり け け け
 夜 け 土 田 小 清 宿 あり 十 三 日 鳥 居 聖 十 四 日 岩 村 小 清 宿 あり 就 河 左 近
 將 監 毛利 河 内 水 野 監 物 同 宗 義 康 尉 十 二 日 の 未 明 小 岩 村 け け
 信 列 伊 奈 け 打 城 也 月 十 四 日 小 信 列 松 尾 の 城 主 小 笠 原 掃 部 助 味 方
 小 笠 原 忠 節 と 被 害 け け け け け 團 平 八 森 勝 藏 け け け け け け
 早 手 合 け け 小 笠 原 掃 部 助 在 け け け 煙 を 揚 け け け 飯 田 城 け け



鳥居嶺

御嶽

遠景

義仲

硯水

植籬なる伴西星名なごも方々迷ふの體と見及ま抱きくくやひん
其衆則國元のく處小森勝後四五里隔陣取く何くくば由以國と
きくく一騎馳りけ付退後くる者どもく討捕頭三百餘信忠に
へ進上以叔勝頼と本曾表手遣りて今福統希も小巳が子の馬廻
たり居加へ於合其勢八千餘騎希表へ居きく二月初旬の頃
形も六張雪降りく谷も霧も平等も成里一向叶ひがれ拘りたれど
今福統希も武者大將くて本居にせ働さる義昌が先勢も島居
陣以希もあて高座の要害と據り居りたれが今福が手遣と安く
より早く先手れ者け由進進してたれも義昌も安くぬ更ふとて苗本
久義尉や合せ出張を於合其勢七千餘騎希表良井坂と喚き叫んぐけより
希居陣りて今福と渡里合ひ既合戦小なる六張雪谷峯に満く戦場いや
さくひやふねをあのぼく割腹もいぢたれ公地くて進ふく人なる勇士た
たひん
互ふきとく辰刻より未刻まであをれをたけし鏑をわり切川掃き川

本居二世三二

南風小風とて先途せ政教よりふあより久義尉父子存れ山の廻とつひ
押廻し模範小実より難あけはさるる今福模範小実より突き入り
敗亡しなれば三里が間退討りてせしめられ討捕頭の江文宗流の者も跡
治勢が捕有愛備後も益井益原小山田友系進其外究竟の兵も二百
七十餘人より其頸共中將信忠に一本居義昌より持申々後々清盛斜
るくくして使者小黄金百兩小袖三重下し送りたる義昌へは比類うれ
働の有清盛のまききいされたる高要しれ信長記小ありけと見えく
義仲親水希居陣小あり後々の法家たりは希西の下里に義系の入にり
けりあけはるより出る是より難彈へ切道へとおかき險阻ありて馬に
あはる更さるくは多く牛馬希居く使來れとく

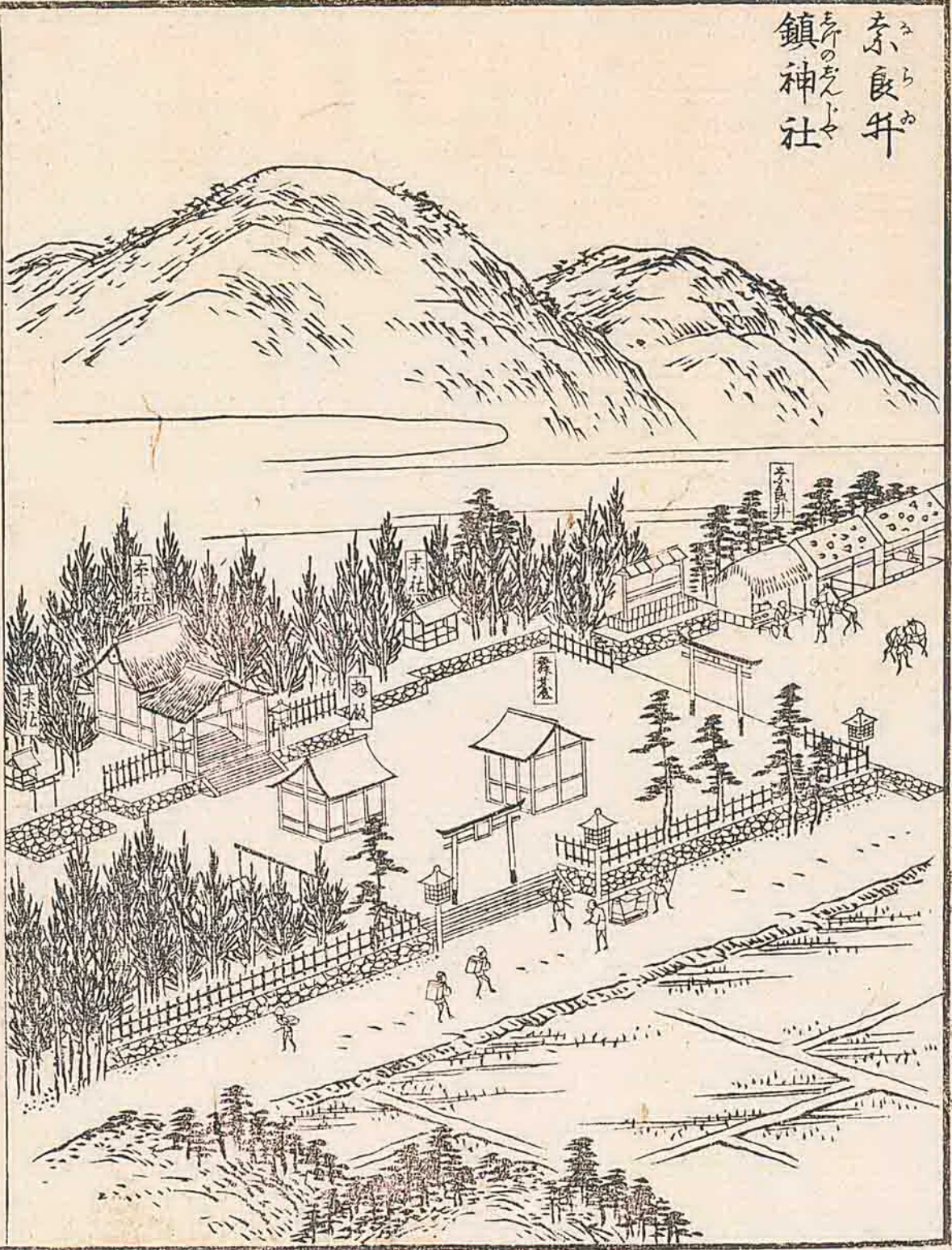
白碑 雲雀よりうへふやまへて流りけ

信 濃 宗良井

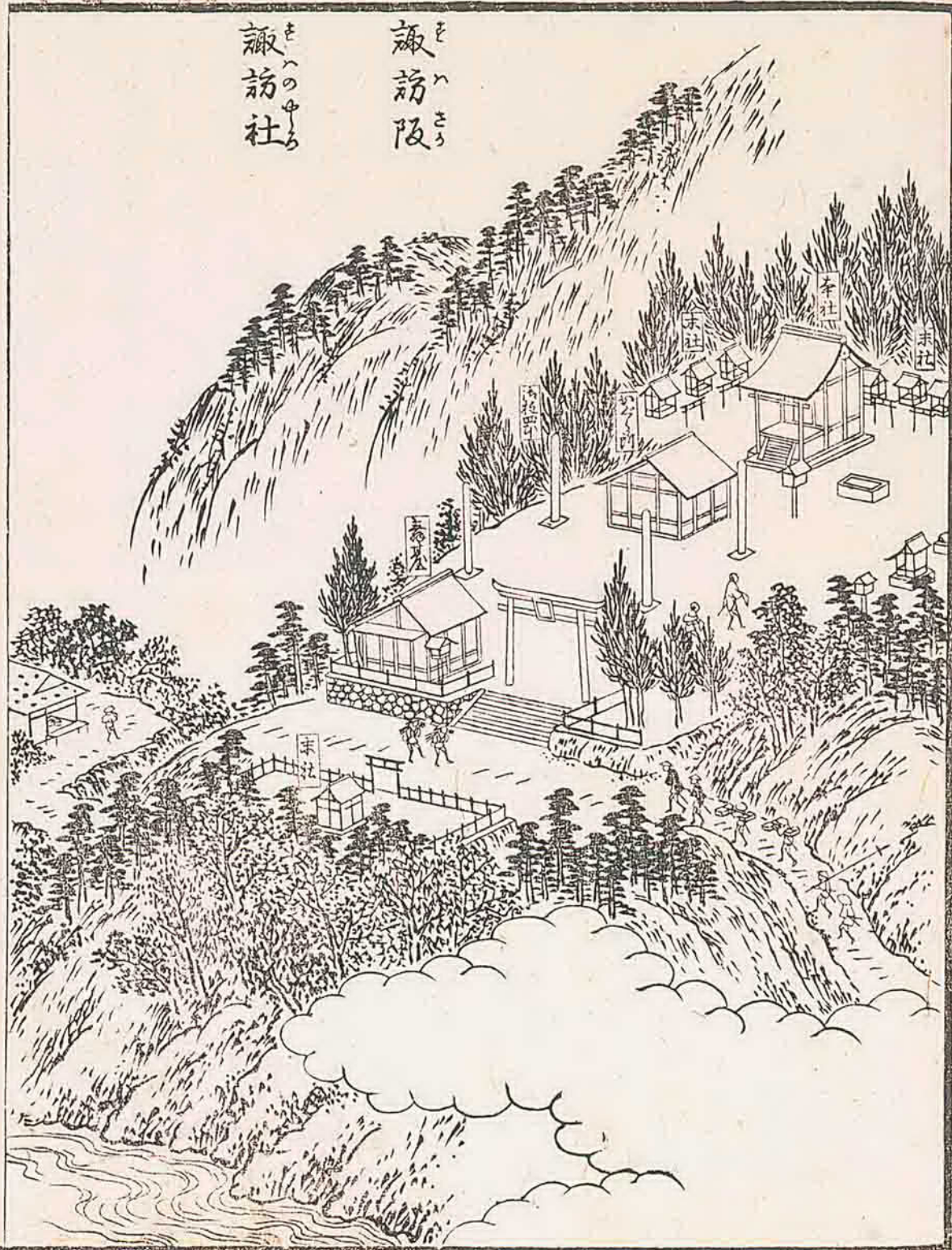
熱川まで一里半又猶井くも書以駅中東為七町餘お對て
巷をかり其存民衆散在には宿繫昌の地りく本居
駅中の甲たり

鎮大明神祠 例東六月二十三日
 鍋懸 伊奈郡の東にあり 絶頂少く東の方を原とす
 索良井橋 伊奈郡の東にあり 壯麗の地へ伊奈郡の東にあり
 大寶寺 天正年中 宗良井と号し 伊奈郡の東にあり
 長泉寺 義高の墓あり 伊奈郡の東にあり
 尚中興 伊奈郡の東にあり
 指勝院 伊奈郡の東にあり
 去々 伊奈郡の東にあり
 白山 伊奈郡の東にあり

索良井
 鎮神社



奈良井治部少輔義高館信の後に天正十八年卒に傳記詳る
 千村治郎右衛門重照宅今民居に追順格ありて今終ふ右根あり
 千村治郎右衛門重照本名義高乃父義昌小姓へて武功あり重照領北八千石
 其後義昌下総國戸小遷ふ幾なりん〜義昌卒に
 通以致して去る其子孫
 今小むけ〜尾刈小奉仕を
 土産 稗 粟 蕎麦 村水田あり 稲 稗 粟
 鮭 稀なりゆへ貢上り 鱒 河ふ長たなりその三
 尺許 年毎こまに産して 諸器を製造して産業と四
 名遠諸器 小民居小田圃あり 諸器を製造して産業と四
 諏訪明神祠 二年に創建 年々累りて天正十年 本名
 義昌武田勝頼也不和りて典厩信豊小令し本名と
 政多居味の合致ふ大を叙ち祠を焚く齋記〜亡
 失して幸實傳らる 別系六月廿二日山所の生神とん
 奉社のに方より移らる 年目毎に月甲寅の日
 建忍ふ神前に拜基神樂あり
 其外末社多し



諏訪社
 諏訪阪

平澤

村の名とて橋郷工塗物と

熱川

幸山さて武里いりへる温泉あり故小熱川と名づく東山道駅次け所より東流松平領と入る

本名岩の岡みか尾列産の所領なり當駅中東西に町

接澤

橋のひびにあり是本名侯奈の所界なり長サ十式間

送北方六間尾列産より

熱川

駒ヶ嶽より流れ其下沢犀川とて其水小流して本に

楠本澤

伊奈郡小聖村の界より小野村八彦神社七奉ふ

古来例とて小聖村

諏訪社

一村は神とあり

観音寺

大田元年楊梅山号に永隆智徳院ふ属に寺傳云

千村氏再建と

本名二六六

鶯着寺

曹洞宗飛梅山と号に

押籠橋

高野の東路中にあり長サ十間本沢架して梁と

熱川四郎家光家

本名備後守家村の四子なりは取小居姓を

尾列氏とて子孫

千村右衛門尉後政家

本名備後守家村の五子なり即家重上明千村

其十世の孫後政なり本名義康に属しては邑小

長とて其子に食邑改姓なり本名義康に属しては邑小

長とて其子に食邑改姓なり本名義康に属しては邑小

萩曾

本名義康に属しては邑小

獵諸獸

鹿猪羊熊等本名此山中より獲て獲に就中

萩曾黒川末川西野王能等源山岳谷るまで甚多し

土産

絲綿麻又接骨藥の傳方と授得と極く奇効あり

五月日橋

長七間

本^{ほん}爲^{ため}山^{さん}中^{ちゆう}荻^{たけ}村^{むら}小^{せう}あり衣^え便^{べん}着^ぎの^の名^な甚^たと新^{あらた}し
然^{しか}れども里^{さと}民^{たみ}傳^{でん}を亡^なくす初^{はつ}と人^{ひと}を誘^{さう}へんか

京
川久
新松平
を判
府の
松平
松平
府に
は十
二里
少く
より

黒川温泉
本村の酒は、
其の味は、
又、
其の味は、
其の主色、
これ、
此の泉、

山神祠
司馬者
秀角平
國茂村
減さる
れ出民
歩はれ
はと衆
村小傳
來由云
て一衆
を宿し
の國

粟の飯を喰ひ秀綱金箒と出して少許の村民に
 ならざる幸哉郷子素作は一士あり古畠孫助と
 試みし秀綱と戦ふ古畠長陰をとりて上方を圍む秀綱
 遁まざるを知らず懐の黄金沢河中へ投てき上りて自殺
 其後郷人河沢なる小金の光あれども取上る岩の石なり其靈
 祟り成なり郷人多く狂れり又古畠小忠の多しちひふ
 怨むところを起りて神主又創業孫といふ書に天正十三
 豊后秀吉公就米又野の城主五郎八景迎ふ余りて飛騨を討
 たり又國司秀綱の軍殿とて逃る信洲本曾入る郷
 人のため小殺さるといふ秀綱古代々飛騨國の國司と
 権大納言自國といふ其父を
 ろふところを威亡け

山嶺さんりやう
本嶺ほんりやう
新嶺しんりやう
の嶺のりやう
大嶺たいりやう
中嶺ちゅうりやう
黒嶺くろりやう
赤川せつかわ
至るいたる
路みち

助く身の長七尺許ある人より我頭より細く是と
 捕る人より則ち火着と焼くをまたる髪とせり
 を夾んて捨り山姥大木根に山小降ふと里村の
 式人亡り里老大お焼くは婆が所なりとてある
 と包く園ふや又一壺の酒も毒と入るや山姥
 其好今に至り山姥に放す
 焼棚と云ふ土の説姑くこふ孫に
 山小る山中子川よりありお作人箕作翁と
 人より農と業とく又童親翁ありて日く農の
 山小る山中子川よりありお作人箕作翁と

今製のそのふりみか神伝なりとは此處に
 黒川本谷上巻にありむり本義昌飛驒に
 黒川の聖中にあり里人相傳一本巻殿庭子あり
 其長そ尺貳寸極細小子とりし里民と云ふ

白の中へ隠し又竺法護の其死見へば其棲き半知べし
 及ぼすに葬所又其傍に長控塚ありて種々其室物と
 茲む今も致さるる者忽ち病と交り里人た小
 恐れ敢て犯し奉りたり
 澤赤川村あり此の古邑甚だ恐く其水も亦悪し古へ
 村中男女お交り毎々正月五日亦綿を懸漂めり是

西野

黑澤

御
山だけ獄け

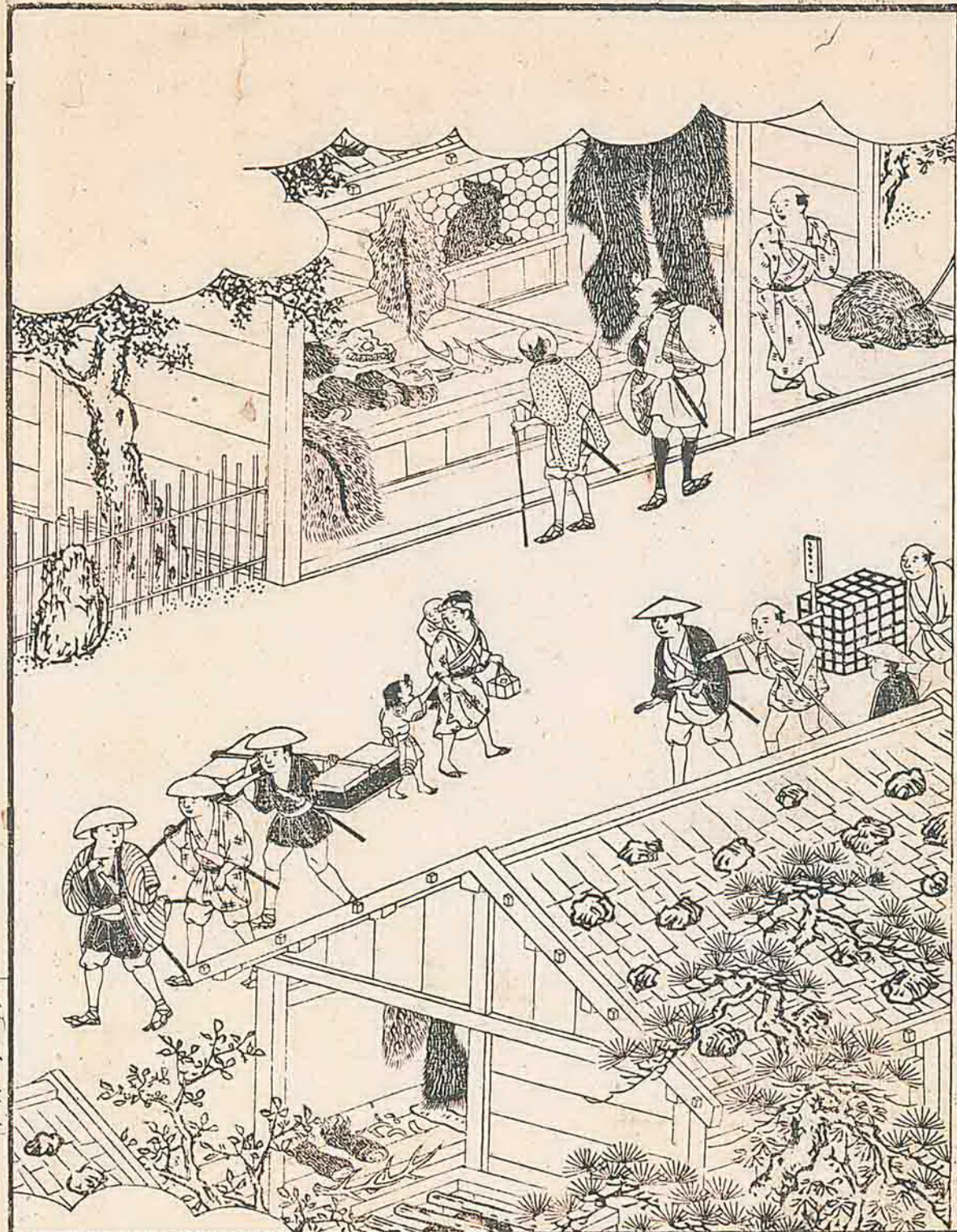
権現祠ごんげんのすゐ黒沢の宮とてくろさわのみやとて
 卒社そつしゃ為文の二祠あり楠安氣大菩薩が安に延長三年
 鎮座至徳二年本曾伊豫守家信造り人爲宮とて天文二十
 三年本寺左馬頭義康造営りて殿いんぐん
 禮堂らいどう竪八間 卒社禮堂そつしゃらいどう竪八間 寶藏一字 祭禮例年六月

一、本卷之卅八

御之
嶽

十二日十三日福島三寺の僧来り大般若經淺釋を且流鑑焉
三騎あり越く津嶽へ登んとするもの紫齋七十五日六月十五日
山に登れば祠の寶物本若源長政永禄三年六月十三日御嶽
に雲向本牌其姓名と録に本若義昌欽仙の画板二十六枚と
獻に今其四枚失に武田勝頼の書翰一通其録古文書多く有
くが洪水に遭く流亡す祠宮武居氏守に

信濃一列の大山なり西登雲澤。赤川王滝等其麓に育
 星沢より獨奉祀を毎年六月十二日十三日諸人紫衣して
 登ふ全く富士山に登れがみし絶頂に小祠あり圓三石池
 ありて其側巨巖矗々たり四季に雪あり靈境と云ふ
 小登ふに四里ありて堂あり夜中炬を照して峯に至り
 祠あり金剛童子と云ふ小憩ひて天明杖侍は急五粒松多
 枝と垂く乳龍の如しこれを名づけし御松と云ふ盛夏



とくども山間小積雪あり料本生せむ又三里登まじ絶頂に至
二祠あり一は王権現堂といひ一を日權現といふ其西水の峯に三祠
あり一を俱利伽羅といひ一を八王子といひ一は土祖權現といふ
其東の峰に三池あり一つの池に水涸る一は池に水あり
一つの池に水涸る西に小流あり其小流に地獄谷といふ硫黄多く溪
川ありて王権現といふ濁川といふ是硫黄の氣に於て其水甚だ
臭きなり又山上小島あり其島の如く毛文唯雄の如く人と
見ても驚かば山より一草生れ葉蔭蕪小似たり小菟咲く状重
葉れおろし色紅葉なり名づけく駒草なり又一草あり葉小
似く大なり葉軟にして里人採て食ふを芥菜といふ
氷瀨園道王権現より滝越る至山麓其園道に絶壁數十級水涸
て藍の如く生れ名づけく生れ名づけく橋をたづねて山中に八
橋あり長サ七間
少人見る
かなり

土産十一鳥

本名谷中にみかれあり形臨嶺の如く一啼声十一と

諸獸

鹿 常に雪を侵し入る諸獸は鹿を多し
熊皮 いみへと貢ぐ本名谷の山に生れこれ狐の皮

山神

狐子 本名谷の山に生れこれ狐の子に似く尾毛

山神

狐子 本名谷の山に生れこれ狐の子に似く尾毛

山神

狐子 本名谷の山に生れこれ狐の子に似く尾毛

山神

狐子 本名谷の山に生れこれ狐の子に似く尾毛

岩戸権現祠

王権現上り 岩間小祠を建清泉岩壁より湧出源くや

一は絶頂祠家傳云是御嶽の別宮なり毎年六月十八日諸人
御嶽に登り祠官導りて文龜永正天文弘治永禄等の祭文
あり又御嶽の縁起一卷あり天正二十年二月也末は書天正
の年号を十九年と云羅所謂二十年と云曆候ありや思ふれ
む御嶽の鳥居ありふふくは地を穿んぐ今小島居
原といふ

本曾殿墓 二沢小里人其名沢志るに只本曾殿とてこれに本曾左
系大史義元飛騨の國司を合戦しとて終て軍敗して令次
隕以即此墓なり人知

權守兼遠墓 三嶋小里古石塔婆なりいづこの人知とて墳と墓を
其由緒詳かり

崩越古城 二嶋の後北山トあり本曾左系左史義元飛騨軍
城拒む要害の遺址なり

三浦山 二嶋山本曾の山にありて王権より登付路あり
三浦山 二嶋山本曾の山にありて王権より登付路あり

はふと津嶽の東山の麓より登付坂ありとてこれより一峯

みづる名にありて殿中より一山へ遙く津嶽の殿ありとて

又高嶺を登まれば飛騨信三列の東なり標を建てて誌と述ふ

山状下り八町ありて一塔橋あり是九嶺の第一なり其下

洞あり水無澤とて又高嶺小隱む巨巖あり鳥帽子岩や

これと登まれば方峰を歴くや見へく駿河の富士誠北とて
白山より詳なり第六嶺に至れを洞あり琴沢とて又板屋

ありとて小總ふ所なり已めて高嶺を登まれば其間の山路を伏載し

て徑をふり橋を架して登をかり艱難辛苦して第九嶺に至れば高

山高嶺を極むとて地平ありて大通のやとて此奥金崖とて

則津嶽の岬なり其路左を飛騨小里一其上を飛騨嶽とて飛騨川

より下り其路の右を信濃小里一して終子嶽とて其下に瀑布あり

旁と散れがみ一錦とて百間嶽とて是王権川の源なり下流を本曾の

大河小里合ふ其上の嶺石壁屹立易くは嶺小これを登まれば飛騨

界より下り第九嶺より第十嶺あり行程約十里越えの道小

通ふとて下り小白谷に下る其西岸即本曾王権山なり其東の岸

山中三浦とて一の坂あり証小舎とて小里人云むとて三浦をま

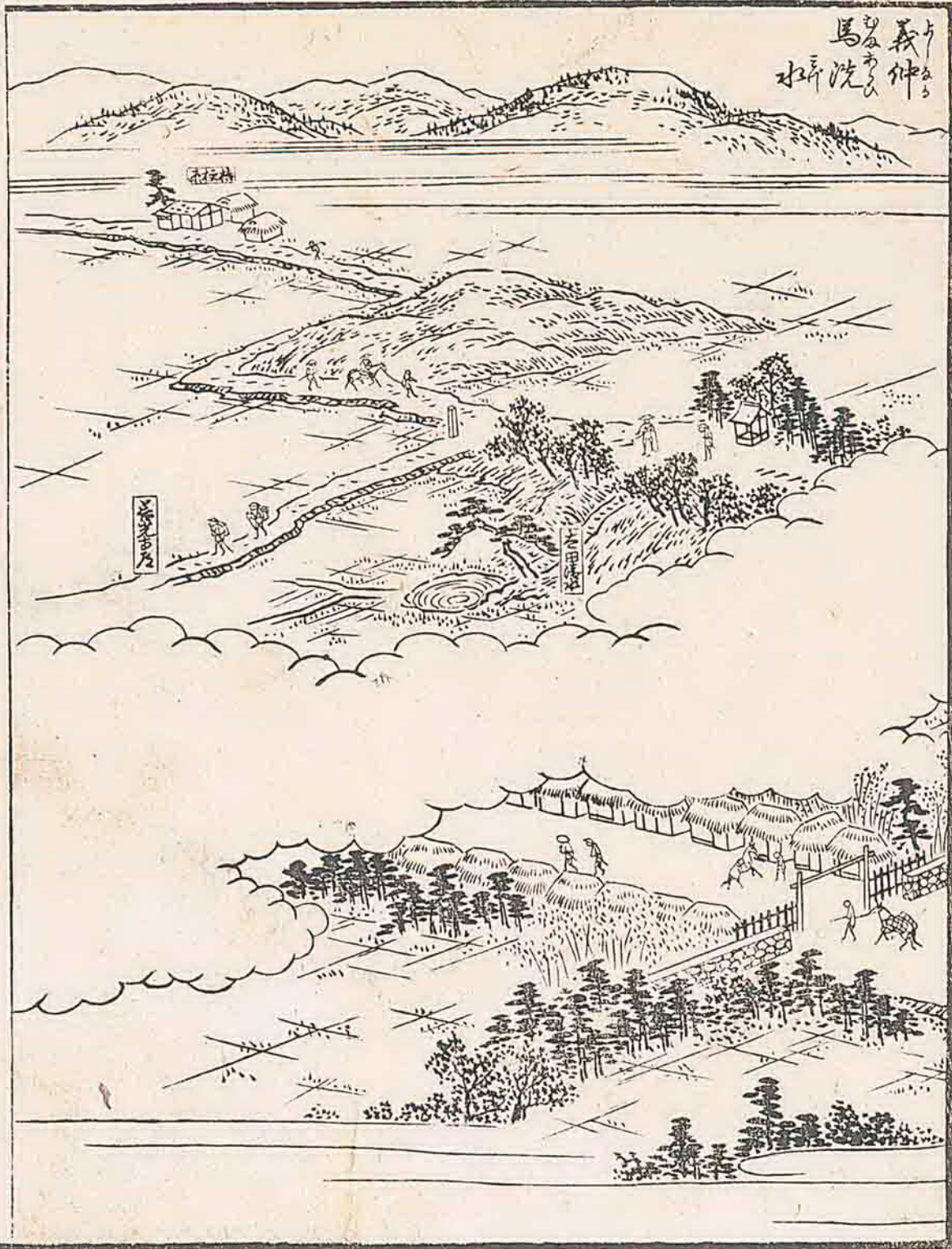
り者ありて同壘してとて小里に極むも寒苦とて終て同壘
居臥越越小里これより白谷に至る能越小里九百間嶽あり
白谷小里より行程又十里許山中度大なりは山中に良材あり

擬木似る樹あり桑極と小きう作れを都賀とく又一種あり桑油
わけて背白くむさうて竹のやうに輝く裏白擬とく俗これと白比る
と名づく又一種あり細葉ありて齊整なり是は虎尾擬と号く
俗は唐松ともいふ種白本屋小可なり又一種あり桑細くふて流る
るの何れ阿羅々本と号く又新羅松及び五粒松なり桑槐と云く
洞一樹の皮まじり実ひ若く俗にこれを青ぬ古といふ其本と試て新
とすふつと乾ばばは能く熊鷹の跡を追ふく雲気侵してふ入
時は本と試て焼火とく寒と凌ぐとく樺本あり別本州ふは種は
我に其皮炬とくこま爪鷄鷄炬と号く蓋これを焼く一ふ入くも
滅ば故小稽を使ふその花は炬を焼く水と照して煙をふ可く
又自樺と名づくふの何れ其皮重なり腐く剥とれ紙のごとく
炬燵ふ可なり又樺の本は似るその何れ皮腐く本理ありこれを
水茅とく杖小製杖なり又雲葉本とくあり即本州に我に

俗は色深を号く紫陽小似る葉細長し竹のやうに赤実似る
○は山小鳥あり栗皮に離と生る鷄鷄のやうに甚く多し又一種鳥乃
れ鷄のごとく一皮黒色去人呼て海鳥とく是本州に所謂山鳥なり又
御嶽蓋樹の地小あり取難の如く朱冠青趾羽色黒白相同る其名と
鶴といふ但し棲とく雲中にあり人見ず幸なり

○三浦老吏の宅中三浦山あり里老相傳く云和国合戦の時其族
小逆く隠る其後滋越小移ふ今に至りて滋越村の百姓は三浦氏
称に終成訛りて三年移りて猶三浦の字と書に東鑑中和国義盛
殿に敗て首と授けし時一族ふ討死に只朝比奈三郎泰秀其後
残るは泰秀の母と巴女なりは女本名兼遠が女めて泰秀は其子孫
後世に小逆居るも知れず滋越の百姓兼遠を祀りて地主神
とく三浦老吏の墓中三浦山の中ふあり古樹多く墳あり是和国義盛
の族建ふなり述くふ事なり頗其子孫力ありある時足徳園

馬義
水所洗仲



原 梗 栢

洗馬
真福寺

武士の墓

年うて

あれ

きー

きら

戸

宇万伎



小郷本行其里人之岩を脚走六十人あきお種族推ふは利を以て其子に余に肩を架して往く里人大小駭く且大木茂松樹を杖と一本多小帰ふ又馬を負ふと越る幸越越て見る所のめれの勢力朝比奈三郎小あはれて往くあきお小居る更更して疑危うは

は一條と鎮主の有司本居の山中巡檢のありむに其本居誌を省畧し且本居路駈跡小罹一のを

都々落合の駅よりけ驛まで廿一里あり枝蕨の山路よりて崖路棧道多く難難辛苦の路中より勢川より柿本村中畑若神子。斤平。小橋沢。大那本。大橋沢。多く本居路の界にあり小標本育西と尾別所領東と松本領よりて往て場橋よりて大橋沢の上より千足原より所ありて是六本居義仲多く馬次廻り所なりとせし處に沢は橋ありなり親音堂又岡の森の中に八幡宮の處にあり幸山よりて

本山

洗馬まで三十町西の入小橋あり川左小流るは種も本居山より流るは本居の幸谷よりなり

本山

本山親音堂 本山の所の信列巡礼所廿一表く小沢川を過くは

橋あり

長サ十間 橋爪小龍大神の鳥居ありこれを遙ふとぐねて人煙

行々やして又より新樹程隔る隣にひ小疎一東西の

客とみか知事ありは村南村ありて洗馬の駅より

温尾まで一里三十町は所より越後葛田へ三十を里

洗馬

信列河の中流へ十一里松代へ十六里く

義仲馬洗水

本居洗馬とて洗馬の東にあり

東鑑云

治承四年十月十三日 木曾冠者義仲

尋亡父義賢主之芳躅 出信濃國入上

野國仍住人等漸和順之間 為俊綱

利太郎也

雖煩民間不可成 恐怖思之

由加下知云

善光寺別道に馬の東

桔梗原先馬と堀尾の間にあり遊獵の里なり

其外小笠原氏といはれ信玄の先鋒將利を遣ふ等と松平の隙を小笠原氏といはれ信玄の先鋒將利を遣ふ等と松平の隙を

武田信玄の嫡子武田玄勝義信甲府を殺馬あり

まづそと木多に押をさす河を桔梗原に押入る先鋒將利

左馬尉飯室三郎を捕其外馬場内藤喜日三将ら五頭を先鋒進んで

既ふ桔梗原よりうらまは旗本隊もあは後陣の勢をうらまは堀尾氏より城に

大膽を交長時と一家に同族お捕負基舎弟刑部お捕以下三千餘人を

捕向ううらまは勢六月六日已に桔梗原に馳せお捕小旗砲をお遠く後社あま

互にお捕入るも追ひ返さず相残小笠原隊員六百七十九人討死し

て原志とて引退け長時と小笠原軍勢を成りし其勢四千六百

桔梗原に押入る七日の卯刻より城を破る敵味方馳合せ捕翼小軍を

堀尾信濃

真鑠小岡河馬東為小馳遠に旗旗南に入孔とて防ぎ戦ひる分岐とて
百千の雷乃一度お落しおちあはゆる小笠原勢も今日城限とありい
定し幸あねば切きども殺しも弱らばおちあはゆる小笠原勢も今日城限とありい
は先小笠原と進るをねらひて信玄の武威強大とて成にるなりた
る武田軍記紙にぞ見るべし

下諏訪へ三里堀尾陣よりあは松平領よりけしより四里あり

松平丹波守度の領地六万石信列より山岡度と平原の地

なりけし色のあはみお城後の旁へ派ふ又おねらひに料を通る

越中へ行道あり

阿禮神社堀尾小岡河延喜式神名帳小云筑摩郡二座の内之大門村

常陸神本神社より未だ松平の内外宮修難宮藏傳石等水神

平野神庚申子安半頭天王痘瘡神誦詠多賀度堀尾田松尾

犬飼清水堀尾のあねの

塩尻

塩尻の嶺より下流の所あり塩尻より二里登る嶺より
何某と格殺ありし由りは傳めし甲列勢と
信列勢と合戦ありし由り

武田晴信翌日卯刻小塩尻市小若くは敵味方間を揚ふや否と拔と
けまき切て入鎗合戦退る一之壱一之壱澄夜と敵よりこれども
敵は主戦より味方より長途小勇其上一之壱有餘の敵兵小味方傳ふ
六千張より相戦む甲兵大小勇果てき見くつらたされ晴信
屑とも志あり旗半張りより横入め七頭八例して戦ひあふ或は
馬上より組で敵首をとりぬもあつたは隙ありとも足ざりたる
然れども晴信自兵隊魔と軍率以励一之壱敵兵は中退るされ
足並四度路よりあふ敵軍の中より足並澄夜と麻毛より馬小
乗る武者指物を切おし仰殿あふはつと馳來り隙をとり
晴信の右の股をきりし小突所を晴信其後の隙の隙乃首張極を
たすし驍ぬ俸してはしるふ小山田平治左衛門尉馳來り其武

者以馬より逆ふしあし押へる首をうれぬるを敵軍より
引きまき熱軍極に敗走し信列の二將より首陣せざる内なるふ
雲合の集り勢よりふ一手切の合戦して手負死人若干なり
と主張捨子と親と顧む所とより小逆達より追信く討殺小首と
幸八百七十二級より晴信の思慮より小若くは遠く安きと敵と進
處一軍勢より小勇あり諸率指骨以て中より小山田平治なるが
働と他小異とて則威状をきりしる

今十九日卯刻信州塩尻郡塩尻市一之壱之初頭一之壱討
捕桑神妙之至惟孫可抽忠信復肝要也仍如件

天文十七年申年七月十九日 晴信

小山田平治左衛門より

晴信より河中将小澤政家あれども敵一騎もあふを返し十月十日
甲府小澤陣より移りし河中将軍記よりして見るべし

浅間祠せんげんのやしろ
は所原山よりて樹本なり
大岩おおいそで
多武文許模中武間餘
垣尾を立と杖沢村より首塚ありは古戰場より長坂芝の
栗屋城より垣尾嶺に登ふと終より西に筑摩郡之なる富士峯
足る又諏訪の湖高瀬の城など解りて四ッ座より芝見村
より峠が炭をこむたの方への字山足ゆきは所諏訪嶺とも
いふ東堰村小板橋あり諏訪の原といふ成るく戸川よりこれに
も板橋ありて長サ十間許左の方へ諏訪妻の文字へ直通ふ
あまは志げく遠敷より下諏訪の駅よりして猿倉へ泊れ

